

「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた(Ⅱコリント 5:17)」。

これを書いた使徒パウロの強烈な個性、有無を言わせない雰囲気。カルヴァンや内村鑑三もこのタイプかもしれない。「神の言」のために世の習いを頑として受け入れないが、後者二人の私的な書簡から類推してみると、パウロにも人間的な膨らみはあっただろう。だから私たちは、パウロの断定的な口ぶりに反発せず、語られた内容それ自体を、生きている事柄として噛みしめよう。

昔の偉い伝道者のことではない。私たちが「キリストと結ばれて新しく創造される(5:17)」らしい。私たちの何が、どこが新たに創造されるのか。すでに存在して愛着ある私はどうなっちゃうのか、創造されていく過程で実感は伴うのか。

霊的な創造は、肉的な語彙に納まり得ない(5:16)。だがキリストの霊は降誕して肉となられた。だから私たちの肉の言葉で、なんとか霊の創造のことを聞きたい。

「主の霊があなたに激しく降り、あなたも彼らと共に預言する状態になり、あなたは別人のようになるだろう(サムエル記上 10:6)」。

「あなた」とは油注がれてイスラエル最初の王となるサウル(10:1)。サウルは後継王ダビデとの争いで晩節を汚すが、若い頃は謙虚で(9:21)、しかもイケメンであった(9:2)。

サウルは父キシユに命じられて数頭のロバを捜しに行く(9:3~4)。この時代、海の民ペリシテが国土の奥深くまで占領していて(10:5)、家畜の捜索でも怪しまれただろう。しかも「エフライムの山地、シャリシャ、シャアリム、ベニヤミンの地を越えて(9:4)」とは、直線距離でも百km以上ある。ロバは見つからず、遠出のついでに宗教指導者サムエルを訪ね(9:6)、イスラエルの王にされてしまう(10:1)。

サムエルが「主の霊が激しく降り、別人のようになる(10:6)」と語った通り、サウルは預言者集団に迎えられ、神の霊が激しく降った(10:10)。これはサウルにとって大転換であり、ここからイスラエルが王政へと大きく舵をきる。私たちにとっても霊的な洗礼で生まれ変わることは(マタイ 3:11)、生涯最大の転機だ。

私たちへの霊の降り方は、自覚できないほど穏やかだったかもしれないが、その後の歩みや方向を決定づけている。霊の出来事は、私たちの肉の言葉や感覚では捉えがたい(Ⅱコリント 5:16)。

サウルは「二人の男に出会う(サムエル記上 10:2)、三人の男に出会う(10:3)」と告げられた。「出会う」を直訳的に言えば「見つける」。願っていたロバは見つからなかったが、サウルは本当に重要なものを「見つける」ことになる。

従者と分れ、独りになったところで(9:27)、「主の霊が激しく降り、別人のようになる(10:6)」。見失ったもの、捜しているもの、とは比べようがない霊の創造に出会う(見つける)。

「これらのしるしがあなたに降ったら、しようと思うことは何でもしなさい。神があなたと共におられる(10:7)。新たに創造された者には神の思いが響いている。だから「しようと思うことは何でもせよ」と。洗礼の「しるし」を身に負う私たち一人ひとりが、それぞれ「しようと思う何か」をする。

世においても、教会においても、あなたが「しようと思うこと」を何より優先せよ。「これらはすべて神から出ること(Ⅱコリント 5:18)」だから。

新たに創造された私たちは神に赦され(和解)、その途方もない恵みを人々と分かち合う(5:18)。そのために一人ひとりが「しようと思うこと」をする場が教会。



《おまけのひとこと》

数多の形状が絶妙に組み合わせられた石垣 セメントでがっちり固められたブロック積み教会とは随分違う しようと思うことをする一人ひとりの石はいったいどう組みあがるか 聖霊の腕前拝見